



## 人間理解の複雑性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村山, 登 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9104">https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9104</a>

## 人間理解の複雑性

村山 登

最近、学校から札幌へ帰る際に時々車に乗せていただく某先生に、「先生は普段はおとなしいのに、車に乗ると人が変わったように短気になりますね。これが二重人格と言うのかなあ。」と言われて、がっかりしたことがある。そう言えば、娘の運転する車に乗った時も、同じことを言われたような気がする。私はジキルとハイドのような二重人格者なのだろうか。それとも車に乗った場合に、私の本性が現れるということなのだろうか。

私達はよく、あの人はケチだとか、彼は臆病だとか言って批判する。しかし、ケチな人が大金を公の為に寄付したり、臆病な人が人助けの為に驚く程勇気のある行動を示すこともある。どちらが本当の姿なのだろうか。ある意味で、どちらも本当だと思われる。しかし、どの面を強調するかによって、全く異なった人格と受け取られることになってしまう。

私達が人の人格を理解する場合、一般にその人の行動を通して理解しようとすることが多い。上に述べた例は、その行動が如何なる場面での行動かを考えねばならないこと、言い替えると、行動をそれが生じている場面と切り離さないで理解することの重要性を示している。そうすることにより、はじめて行動の意味が分かり、真の人格理解に近づくことが可能になると考えられる。

また、人間は極めて複雑な存在であって、いろいろな側面を持っている。したがって、上述の例は人を理解しようとする場合、その個人を一面からだけ見てはいけないことを示しているとも考えられる。私達は、人のある思いがけない側面に遭遇して、それを強調する余り、その人の真の姿を見失い誤解してしまうことはないだろうか。お互いに心したいことである。

さて、それらのことと関連して、私達が人を理解しようとするとき、その個人についての様々な情報に基づいてなされることが多い。その際、その情報が多いほどより正確な理解に近づくことが可能だと、一般に考えられている。しかし、問題は情報の質であって、どんなものでも多ければ良いということではない。いろいろな側面からの、しかも質の高い情報を得ることが必要であろう。

そのような情報源の一つに、知能テスト、人格テストを含む種々のテストがある。これらには標準化もきちんとされて、信頼のおけるデータを提供してくれるものが多い。それでも質の高い情報を得る為には、種々の条件を満していることが必要なのである。つまり、テストの手続きが正確に守られ、その整理も誤りなくされねばならない。また、テストを受ける側の条件も考慮される必要がある。テストへの態度、疲労や病気等の為に、結果が歪められることが多いからである。したがって、テスト一つ考えても、その取り扱いや解釈に慎重さが求められる。

さらに、以上のことを考慮に入れてもなお人間理解にとって、欠くことの出来ない大切なことがある。それは「相手の側に立った理解」とも言うべきもので、特に教育の場面で子供を理解する場合に重要と思われる。ロジャースの言う共感的理解がそれで、その根底には深い人間愛、人間への信頼がある。子供への愛情、子供への信頼から共感的理解が生まれ、そこから教育が始まると考えられる。これは言うは易しく、実行は難しい。でも、教師はその為の努力を惜しんではならないと思う。定年を前にして、自分の反省を含めてこんなことを考えている今日この頃である。

(本分校 教授 教育心理学)